FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくしミュージアム

2001.9.30
No.40

人気企画をふりかえる

ちょっと昔のくらしぶり

リニューアルで常設展示の中に「昭和のくらし」を新設

今回は、人気の高かった先の特別展の展示内容を、写真を中心にふりかえってみましょう。

特別展「ちょっと昔のくらしぶり」には、1万5000人をこえる皆さんがご来場されました。それほど身近で親しみやすく、興味や関心の高いテーマであったようです。

会期中には、多くの方々から数々の「なつかしいモノ」が持ち込まれて、連日のように追加展示を行いました。また、クチコミやアンケート等を通して寄せられた情報をもとに、会期後もじつに大量の物品を集めることができました。駄菓子屋さんや薬屋さんの備品・商品、アイスキャンディーのボックス、ラムネの空きびん、ステレオや冷蔵庫をはじめとする電気器具などなどです。それらは、いま収蔵庫にあふれんばかりに並んでいますが、さらに増えつづけるのではないかと思われます。

当館では、2003年の春に大規模な展示刷新を行う予定です。そのさい常設展示に昭和20～40年代の「昭和のくらし」を大きく取り上げることになっています。特別展での経験、そして集められた多くのモノたちは、このリニューアル事業に活用される見込みです。計画では、駄菓子屋さんや貸本屋さんなどが軒を連ねる街角を復元することになっていて、先の特別展より一段と充実した展示になるはずです。リニューアル後の常設展示（仮称）「昭和のくらし」コーナーの開場を、どうかお楽しみにお待ちください。きっとまた、なつかしく、元気を取り戻せるような展示をお届けできるでしょう。

いろいろな情報やモノを提供してくださった方々には、心からお礼申しあげます。これらをもとに、多くの方に喜んでいただけるような、すばらしい展示をつくりあげていきたいと思っています。

「なつかしい時代」

いま、「なつかしい時代」といえば、昭和の戦後復興期から高度経済成長期の昭和30～40年代に中心があります。社会の中堅層が体験してきた時期です。

昨今の社会の変化はますますスピードを早め、たった10年前にあったものが、大きく姿を変えたり、消え失せてしまっています。どこにでも普通にあったモノほど、大切に保存されることもなく、姿を消していきます。いま、それらの「なつかしいモノ」との再会が、意外な感動をもたらすようです。

とにかく日本社会は、経済発展を最優先に急ぎ足で歩んできました。経済大国の目標に到達し、生活にもゆとりが出てきたのですが、つぎの行き先に悩んでいます。置き去りにしてきたさまざまな社会問題も、ここにきて大きな不安となりつつあります。そんな社会状況が、過去のくらしへの郷愁を増幅させるのでしょうか。それとも、昔をなつかしむ中で、未来への手がかりを見つけようとしているのでしょうか。

子どもの夢を売る駄菓子屋

駄菓子屋は、かつて子供の遊びの拠点でした。子どもに必要なものは何でも売っていて、小銭をもって日課のように店に集まり、お菓子やおもちゃなどを買いました。なかでも、さまざまな賞品をつり下げた「くじびき」は、子どもたちの人気の的でした。胸をときめかせて「くじ」を開き、今日は「ハズレ」でも明日こそはと、気持ちを入れなおして帰ったものです。店には、わずかな小遣では買えないおもちゃも並んでいて、いつかは手にすることを夢みていました。

駄菓子屋には、いつも「おばちゃん」「おんちゃん」がいました。子どもたちに声をかけ、ときには励ましたり叱ったり、みんなの成長を見守ってくれました。いまは、駄菓子屋に代わってコンビニエンス・ストアが各地にできています。いつでも何でも買えて、たしかに便利です。しかし、昔のように子どもの夢を売ってはくれません。気軽に話しかけてくれる人もなく、ほしいものをレジに運んでお金を払って立ち去るだけです。ましてや自販機などはお金を入れるだけです。昔は、ほしいものがあれば声をだしてお願いし、人の手を通して売ってもらいました。

マイカー時代の幕開け

日本のマイカー時代は昭和30年代に幕を開けました。政府が「国民車構想」を打ち出して、国内で大衆車が生産されはじめたのです。クラウン、ブルーバード、パブリカ、コロナ、サニー、カローラなどの車がつぎつぎに誕生していきました。

スバル360は、昭和33年に発売された超小型の乗用車です。徹底的にムダをはぶいて性能を重視した名車中の名車といわれます。「てんとう虫」のニックネームで、多くのユーザーに愛されました。昭和32年に発売されたミゼットも、「あまがえる」のようなマスクをしていて、とてもあいきょうがあります。この車もじつにシンプルで機能的です。小型の運搬用三輪車として、あちこちの町や村を走りまわっていました。

家宝の電気製品

家庭用の電気製品が普及しはじめたのは、昭和30年代のことです。当初の家電製品は、主婦の労働を軽減する生活合理化の道具として宣伝されました。当時の広告文には、「主婦の読書の時間をつくるために」などというキャッチフレーズがみられます。なかでも冷蔵庫と洗濯機、掃除機は、家庭電化の「三種の神器」といわれ、後に掃除機に代わってテレビがこれに加わりました。

ただし、このころの家電製品はまだまだ高価で、庶民にとっては高嶺の花でした。一生モノの嫁入り道具として買われることが多かったのです。テレビなどは家宝のように扱われ、床の間に飾ることさえありました。

昔の子どもの遊び方

昔の子どもたちは、よく外で遊びました。空き地や路地の凸凹地面、野山、田畑、河原、浜辺などをかけまわったり、お寺や神社の境内にもよく集まりました。ちょっと工夫すれば、どこも絶好の遊び場になったのです。

遊び道具も工夫しだいで豊富にありました。さびたクギをみつければ地面で「クギさし」をし、王冠をひろえば手裏剣にして板壁に投げて遊んだりしたものです。仲間の「隠れ家」も、周囲にあるものをひろい集めて、みんなでつくりました。このころは、上級生から下級生まで、近所の仲間が集団で遊んだものです。男の子も女の子もいっしょになって「缶けり」をやり、幼い子がいつも「鬼」にならないためのルールも伝えられていました。

昭和30年代には、店で遊び道具を買うことが増えてきました。買ってもらえない子は、友だちに使わせてもらいました。夏の虫かごや虫とりあみ、花火、水中めがねなど、季節の遊び道具が駄菓子屋に並ぶことも、何よりの楽しみでした。

マンガ雑誌の大流行

昭和30年代のマンガ雑誌には、開放的な明るさと豊かさがみえてきました。「赤胴鈴之助」「まぼろし探偵」「鉄人28号」「鉄腕アトム」などの人気作品がつぎつぎと生み出され、楽しみの付録もぎっしり詰めこまれました。付録マンガも充実し、子どもたちのあいだでは回し読みが広まりました。

昭和34年には、『少年サンデー』や『少年マガジン』の週刊雑誌もあらわれました。待ちに待った連載ものの「続き」を1か月待たずに読めるようになったのです。少しせっかちなようですが、社会の流れにマッチしたのでしょう。

笠松雅弘

新人紹介

学芸員という仕事

窪田裕美

学芸員として働きはじめて半年。しかしその短い間に「学芸員て何をしてるの？」「学芸員てどういう仕事？」というような質問をうけることが多くて驚いています。

学芸員の仕事とは何か。簡単なようで、とても難しい質問です。博物館によって違いもあるだろうし、一言では答えることができません。そしてそのような質問をうけるたびに、学芸員の仕事はもとより、博物館の業務自体があまり理解されていないということを痛感するのです。

たしかに“学芸員”という文字からは、それが一体どういう職業なのかということを理解することはできません。実際、学芸員になりたいと思っていた私自身がよく理解していなかったこともあるくらいですから、一般の方、とくに博物館になじみのない方が、学芸員とはどういう仕事をしているか知らないのは、むしろ当然のことなのかもしれません。

そこで今回、学芸員はどのような仕事をする職業なのか、また半年間という短い期間ですが、実際に学芸員として働いてみて思ったことなどを少し述べてみたいと思います。

学芸員の仕事

博物館というと、まず最初に常設展示や特別展、企画展といった「展示」のことを思い浮かべる方が多いのではないでしょうか。「展示」は博物館の顔ともいうべきものであり、もっとも大切な部分です。そして学芸員の仕事は、まさにこの「展示」を作ることなのです。

「展示」を作るといっても、絵画や古文書といった資料を、ただ適当に並べておけばよいというわけではありません。そして、資料を並べるという仕事自体は、学芸員の仕事のほんの一部分にすぎないのです。

①資料の収集・保管
②調査・研究
③展示・教育普及

これらの仕事が学芸員のおもな仕事とされています。私も大学の授業でこのように習いましたが、その時は言葉通りにこれらの仕事をとらえ、なんとなく分かったつもりになっていました。その言葉が持つ意味以上のことを考えることなどありませんでした。しかし、実際に学芸員として働いてみると、その仕事のあまりの多様さに驚いてしまいました。これらの仕事は一言で簡潔に表現されてはいますが、じつは一言では表現できないほどの幅広さ、奥深さがあったのです。

たとえば、資料収集・保管に関しては、資料を集めて収蔵庫で保管しておくこと、と単純にとらえていました。しかし資料を集めると簡単にいっても、まずどのような「展示」にするのかということを企画し、それにはどのような資料が必要なのかということを把握していなければなりません。そして資料を探し、見つけることができたら、今度は所有者と借用や購入などの交渉や

手続きをして、博物館まで運び、写真をとったり、汚れを落としたりして、やっと「展示」に使うことができるのです。さらに、ほかの博物館に資料を貸し出すこともあったりと、考えてもみなかった作業がたくさん存在したのです。展示という仕事についても、資料の扱い方はもちろん、観覧者に見やすい置き方、ほかの資料や解説プレートなどとのバランス、照明の具合など、考えなくてはならないことがたくさんあります。しかもこの作業は、扱うモノが違えば変わってくることさえあるのです。そのほか、一人でも多くの方に「展示」を見に来て貰うために、ポスターやチラシなども作らなければなりませんし、資料に対してさらに理解を深めてもらうために、資料に解説を付けたり、カタログを作ったり、講演会などを開いたりもします。

学芸員として働いてみるまでは、学芸員の仕事がこんなにも幅が広いとは思ってもみませんでした。学芸員は、資料の扱い方を含めた自分の専門分野の知識を持っていればつとまるような気がしますが、企画力や写真の技術、文章力、デザイン感覚、人前で話す能力など、さまざまな能力と技術が必要とされる仕事だったのです。

このような仕事の多様さのために、学芸員はよく「雑芸員」と称されることがあります。しかし、それは学芸員にとっては研究が一番大切な仕事で、研究以外の仕事は雑用みたいなものだという思い込みによるものだと思っていました。実際に研究ばかりしていて、最後には大学教授などになってやめてしまう学芸員もたくさんいるという批判を何度も聞いたことがありました。そして、そんな批判ばかりを耳にしてしまっていたせいか、逆に大学教授になりたい人たちだけが、せっせと論文を書いているのだろうと思い、研究をできたらやればいいくらいのものにとらえてしまっていたのです。

しかし、研究をしていかなくては「展示」を作ることはできません。まずどのような「展示」を作るのかという企画が立てられないのです。それから資料の収集も、カタログを作ったり、解説を付けたりすることももちろんできません。研究なしでは何もできないのです。

そして、同じ研究といっても、これまで学生時代にやってきた研究とは、根本的に違うのです。学生時代は好きなことだけを自分のために研究していましたが、学芸員としてはやはり、郷土に関わるすべてのことを、博物館の「展示」のために、ひいてはその「展示」を見に来て下さる方のために、研究をしていかなければならないと思います。研究というとどうしても論文を書くことと考えてしまいがちですが、学芸員というのは、論文を書くためだけに研究をするのではなく、「良い」展示を作っていくためにこそ、研究をしていかなければならないのです。研究という仕事は、じつは学芸員の仕事の中でもっとも基本となるものだということを、私は学芸員になってはじめて知ったのです。

とはいっても、そればかりに携わっているわけにもいきません。すべての仕事が同じくらい重要なのです。どれかがかたよっても、欠けても学芸員としては失格です。学芸員にもっとも必要なものは、多様な仕事をこなしていくことのできる体力と柔軟性なのかもしれません。

今、福井で

私は福井生まれの福井育ち。高校を卒業するまでずっと福井で暮らしていました。でも私はずっと福井がきらいでした。福井にはおもしろいものも、すごい人も文化も歴史も何もない田舎だと思っていました。しかし、大学進学のために東京に出て、一歩離れたところから福井を見つめてみると、こんなに恵まれている所はないと思うようになったのです。私がなにも知らなかっただけだったのです。知ることができない環境にあったともいえるかもしれません。学校の授業では福井の歴史に触れることなどほとんどありませんでした。そんな自分の経験を考えてみるとき、郷土の歴史と文化のすばらしさを伝えていくことができるのは博物館であり、そして博物館こそが伝えていかなければならないのではないかと思うのです。

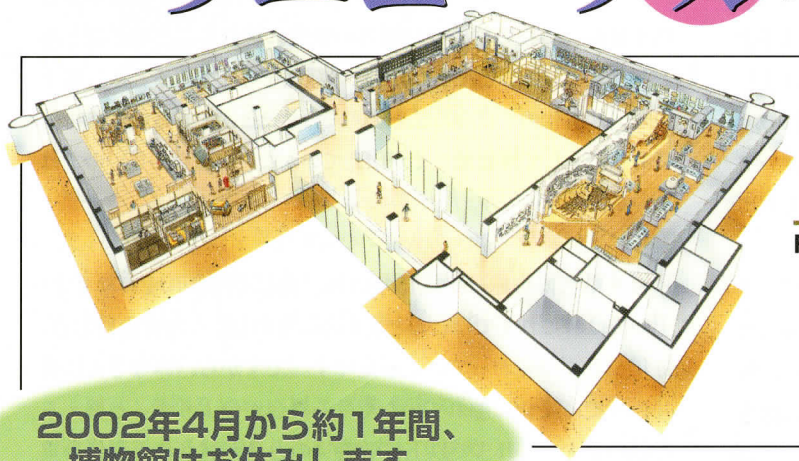
福井県立博物館は平成15年の春、新しく生まれ変わります。その後は、これまでほとんど変わることのなかった常設展示が、毎年少しずつ変わっていく予定です。ですから、みなさんに福井の歴史や文化に触れていただける機会が今よりずっと増えると思います。これまで以上に学芸員の力量が試され、責任も重くなっていくこととは思いますが、「展示」を通して県内外の一人でも多くの方に福井のすばらしさを伝えていけるよう、がんばっていきたいと思います。

（当館学芸員）

耳寄りなお話です。
博物館が新しく
生まれ変わります。

2003年3月

リニューアルオープン！



Fukui Prefectural Museum of Cultural History
（仮称）
福井県立歴史博物館
FUKUI KENRITSU REKISHI-HAKUBUTSUKAN

2002年4月から約1年間、
博物館はお休みします。

ふくいミュージアム
No.40 2001.9.30発行

FUKUI PREFECTURAL MUSEUM

編集発行
福井県立博物館
FUKUI KENRITSU HAKUBUTSUKAN
〒910-0016 福井市大宮2丁目19-15
☎0776-22-4675（代）